

2026 年度 名古屋造形大学

【前期】一般選抜
『国語』問題用紙

【注 意 事 項】

※ 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入しなさい。

一 次の文章を読んで、後の設問（問一～問八）に答えなさい。解答はすべて解答欄に記入しなさい。

言わずと知れた世界的大人気ボードゲーム・人生ゲームの歴史は、おそらくあなたが想像するよりもずっと長い。1860年にアメリカで発売された『THE CHECKERED GAME OF LIFE』は盤面が善行と悪行のマスによって構成され、善行のマスを踏むことでカクトクしたポイント⁽¹⁾を競い合うという、キリスト教的道徳観を強く反映したゲームだった。大ヒットとなった同ゲームの100周年を祝って、世界的コウキョウに沸く1960年に同じくアメリカで発売された『THE GAME OF LIFE』は一転、稼いだお金で競い合う資本主義のゲームに変質していた。そこから日本語版人生ゲームがリリースされるようになり、タカラトミー社によるオリジナルティ溢れるローカライズが徐々に進んでゆく。たとえば『人生ゲーム+令和版』は非人間的な資本主義への失望を背景としてか、お金の代わりにSNSのフォロワー、いわば他者からの承認を集めて競い合うゲームとなった。

実に百数十年にも及ぶ人生ゲームの歴史は、「人生のゴールとは何なのか？」というあまりに重厚な問いへの答えが、無責任なほど軽やかに移ろい続けてきたことを教えてくれる。

今年の春先に『令和元年の人生ゲーム』という本を出したこともあって、とあるインタビューで「人生ってゲームなんですか？」とトウトツに聞かれたことがある。□が達人なので、タイテイの質問には即座にそれらしい答えを返せるのだが、⁽⁴⁾ どういうわけか今回はそうすることができず、今日に至るまでその質問は僕の心の中をモヤモヤと漂い続けている。

よくよく考えてみると、人生ゲームというのは皮肉な名前だ。人間はみな似たような形をしているが、その内面はそれぞれ異なるし、そうすると人生の形やそのゴールだって徹底的に異なるに決まっている。□ア、先述のとおり人生ゲームは時代ごとに変化してゆくものの、ある時代におけるそれは全国津々浦々でまったく同じひとつの形をしている。そのうえ、ゲームの参加者は盤面を自分らしく旅するのではなく、(「台

風で吹き飛ばされてスタートに戻る」みたいなアクシデントを除けば）あらかじめ定められたゴールに向かってフカギヤクに前進してゆくという競争を強制される。くだらない遊びについムキになってしまうように、最初のうちは渋々参加していたその競争に僕たちはつい熱中し、それは次第に熱狂へと変わり、気付けば競争に勝つことそのものが人生のゴールであったかのように錯覚させられてしまう。

だって、ゲームは楽しい。負けるよりは勝つほうが気持ちいい。報われないことばかりの世の中だというのに、そこには小さな達成や成長がたくさんある。そういう意味で、ゲームというのは本当によくできている。僕たち人間の脳を、こうも簡単にハック^Bして見せる。むしろ、明確なゴールを人生において見つけられない人たちにとっては、足元が揺らぐような不安の中でいつまでも立ち尽くしたまま「自分にとっての善き人生とは何か？」という哲学問答と真面目に向き合い続けるよりも、とにかく誰かから既製品の人生ゲームを手っ取り早く買い与えられ、回せばジャツと景気のいい音を立てるルーレットや、いかにも愉快的色彩がリズムカルに施されたマス目たちが指し示すままに、不真面目に動き続けたほうがよっぽど幸せだ……そういう風に感じる人が、イ 実際^Cにそういう風に生きている人が、この国にはたくさんいるはずだ。

ウ、バブル崩壊後の平成初期に生まれた世代の一部は、経済的閉塞感の中でせめて自分だけは幸せになろうと「いい大学を出て、いい会社に入って、いい給料を貰って、そうしてタワーマンションの高層階の部屋に住む」というゲームに参加した。他ならぬ僕自身もその一人だ。結果として、参加者のほとんどは悲惨な末路を迎えた。上には上がいるのだから、永遠に終わりのない梯子レースを続けた先に待つものは消耗だけに決まっている。それなのに、幸せになるための手段であるはずのゲームに没頭し、少しでも他人より優れていたという下品な欲望に支配されてしまったせいで、そういう構造的欠陥を見落としてしまって、あるいは気付いていたのに見て見ぬフリをしてしまった。

本来であれば、そんなゲームを心の底では望んでいなかった人もたくさんいたはずだ。かといって、どうしても参加したい他のゲームが、あるいはゲーム^Dなんかではない崇高な何かがあったわけではなかった。行くあてのない人生の、どうしようもない不安——僕たちはきつと、そこから逃れたくて仕方なかったのだろう。その結果、僕たちはゲームに勝つことができなかったし、幸せな人生を手にもできなかった。いまさら新しいゲームに参加するだけの気力もなくなってしまう、手に入れ損なったもののジェネリック品に囲まれながら、日々ぼんやりと残りの人生を消化している。ゲームだか人生だか分からないものの周りを、僕たちはどこかに辿り着くこともないまま、永遠にぐるぐると回ってい

る。

「人生ってゲームなんですか？」という問いへの明確な答えを、結局僕ははまだ持っていない。人生がゲームだとすれば、少なくとも僕は人生というゲームとうまく付き合うことができなかったし、人生がゲームではないとすれば、例の馬鹿げたゲームのほかに真つ当な人生らしきものを発見することができなかった。

そんな僕にできることといえば、せめて後進たちが同じ過ちを繰り返さすことのないよう、どこにも辿り着けなかった世代の一人であることを恥じらいもなく認めたうえで、自己批判みたいな小説を書き続けることくらいなのかもしれない。

（麻布競馬場 『人生ってゲームなんですか？』より）

問一 傍線部(1)「カクトク」(2)「コウキョウ」(3)「トウトツ」(4)「タイテイ」(5)「フカギヤク」を漢字に直しなさい。

問二 空欄ア～ウに補うのに最適な語をそれぞれ次から選んで番号で答えなさい。ただし同じ番号を二度以上使用してはいけません。

1. つまり
2. そして
3. たとえば
4. よりによって
5. しかし

問三 傍線部Aとは、「人生ゲーム」の場合何がどのように変化したことを言っているか。説明しなさい。

問四 傍線部Bについて、「ハック」された結果どのようなになると筆者は言っているか。その答えとしてあてはまる箇所を文中より四十字以内(句読点を含む)で抜き出し、その最初と最後の五字ずつ(句読点を含む)を書きなさい。

問五 傍線部Cのように考えることを、評価も含めた別の表現で言い換えている箇所を五字で抜き出して書きなさい。

問六 傍線部D「ゲームなんかではない崇高な何か」として筆者が文中で記しているものがある。文中より十一字で抜き出して書きなさい。

問七

傍線部E「どこかに辿り着くこともないまま、永遠にぐるぐると回っている」ようになることを、別の表現で記してある部分を本文から十五字以内で抜き出して書きなさい。

問八

本文の内容と合致するものを次から二つ選び、番号で答えなさい。（順不問）

1. 人生の目的は競争に勝利することだと考えるのは錯覚である。
2. ゲーム名にも表れているように、人生は延々と続く競争というゲームによって成り立っている。
3. 人生の目的は何かを自ら考えることは面倒なので、誰もが手っ取り早く他から与えられた目的のままに生きるのがいい。
4. 人生がゲームなのかどうかはわからないが、どちらにせよ幸せになれなかった人は生きる目的もわからないままに漫然と人生を送ることになる。
5. いい大学に入っていい会社就職しても結局幸せにはなれないのだから、ゲームをするように不真面目に生きた方が多かったと多くの人は考えている。

二 次の文章は北村薫の小説『リセット』の一部である。この部分は「天皇は人ではなく神である」と教えられた太平洋戦争のさ中、神戸の比較的富裕層の家の子が通う高等女学校が舞台となっている。読んで後の設問（問一、問七）に答えなさい。解答はすべて解答欄に記入しなさい。

中島先生は、^は這い寄る冬の寒さに^{かん}鉤を^{かん}かけられたように、一層、^や痩せられました。袖口^{そでぐち}の大きく見える、細い腕を動かし、何首かを黒板に書き、講義して下さいました。

もう、時間も残り少なくなった時、先生は^{かきのもの}柿本人麻呂の歌に触れました。

大君は神にしませば天雲^{いかすち}の雷の上にいほりせるかも

「この歌は持統天皇の御代^{みよ}のものとするところもあるが、さだかではない。帝^{みかど}が飛鳥雷^{あすかいかつち}の丘^{おか}に仮小屋を建てられた。その時、陛下は神であらせられるから、雷の上に住まいになる——と申し上げたのです」

迷いなく《大君は神にしませば》⁽¹⁾といい切る言葉の力強さ、続く言葉の荘重な響き。わたしは、ア、時が発条仕掛け^{ぜんまい}か何かで、急速に巻き戻されるのを感じました。

西へと向かう列車で、わたしは陛下とすれ違いました。あの記憶が轟々^{ごうごう}と鳴る車輪の音と共に、鮮やかに蘇^{よみがえ}って来たのです。教室の席が、二人ずつ向かい合いの、東海道線の席に思えました。空は、灰色に塗り込められたような曇天でした。その薄暗さが、締め切られた^{よろいど}錠戸を連想させました。

——陛下は、雷の上に座す^い、戦神^{いくさがみ}であらせられる。

理屈ではなく、鳴く声から、鳥を⁽²⁾驚と知るように、歌の響きから自然に、そう胸に落ちました。

先生は、細い声で、わたしの気持ちの動きを追うように、おっしゃいました。

「この歌こそ、天皇陛下に帰一し奉る⁽³⁾、真実純粹なる精神の表れとされています」

それから、白墨を持った手元に目をやり、ぽつぽつと付け足しました。

「……わたしは、人麻呂がこの歌を詠んだ時、陛下も、周りの方々も、微笑⁽⁴⁾まれたのではないかと思う」

気を付けなければ、そのまま聞き過ごす言葉でした。□イ、何かひつかかるものがありました。どこがそうなのか、うまく表せません。

□ウ、終業になりそうでした。すると、優子さんが手を挙げました。

「何か？」

先生の声を受け、優子さんは、さっと立ち上がりました。

「――つまり、この歌は洒落^{しゃれ}だということですか」

A 蒼白^{あおしろ}い先生の頬が、微かに紅潮するのが分かりました。そして、唇の端が少し上がりました。

「洒落^{しゃれ}といつては、よろしくない。ただ、《神にしませば》というのは、この頃、慣用的に使われた表現なのだね。――わざと大袈裟^{おおげざ}な表現をすることによって、至誠を表したのだと思います。――となれば、歌の妙味⁽¹⁾はその後を、どう続けるのかにある。《神にしませば、雷丘に仮小屋を建てられた》。そこに表れた人麻呂の真心は、陛下にも、周りの方々にも、温かなものの染み^{しみ}入るように伝わったことと思います」

先生の口元の動きが、優子さんに向けられた笑みだと分かりました。先生のおっしゃる《陛下の笑い》も、どこか似通った《こいつ、やりおるわい》といったものでしょう。

そこで、わたしの引^Bつ掛かりの正体が分かりました。そう考えると、歌の《悲壯》といつてもいい莊重さが消えてしまうのです。かわりに、無骨に近い、おおらかさが生まれたように思えます。色合いの変化は、驚くばかりです。

わたしのすぐ横の、沢口という瞳^{ひとみ}の大きな子が、たちまち手を挙げ、指名を待たずに立ち上がりました。

のんびりしていて、時局のことなど、あまり考えないお嬢さんも多かったのです。一方で、沢口さんは、いつも眦⁽²⁾を決している子でした。

「先生っ。先生は、帝を《神》と歌うことを大袈裟とおっしゃるんですか」

目は真つすぐに、蒼白い先生を見つめ、机をつかんだ指が小さく震えていました。

「大袈裟……」

「そうおっしゃいました」

教室は、しんと静まり返りました。沢口さんは、その静寂に、かえって高ぶり、激しく付け加えました。

「――不敬ではありませんか」

先生は、しばらく間合いを置いて、

「……それほど大きな気持ちがある。大きな思いを表すためには、最も大いなる言葉を使う必要があるということです」

沢口さんは、身を乗り出し、

「⁽ⁱⁱⁱ⁾詭弁ぎべんに聞こえます。率直に、取り消されたいかがですか」

先生は、分厚い眼鏡の縁に手をやり、位置を直しました。

「この非常時において、わたしの言葉は誤りだったと思います。取り消しましょう」

沢口さんは、エ 鋭く迫ります。

「そこでまた、どうして《非常時》という条件を、お付けになるのですか。不純な気がいたします。真理とは、時によって変わらぬものではないのですか。だからこそ、真理なのではありませんか」

実際、先生のお答えは瓢箪鯨ひょうたんくじのようにぬらりくらりとしたものに思えました。肯定にしろ否定にしろ、はつきりしてもらいたいと思いました。その時、終業の鐘がなりました。

^D先生は、ゆつくりと教室を見回し、それから視線を沢口さんに戻しました。その目の、不思議な穏やかさは、忘れられません。慈しむような瞳ひとみでした。

「分かりました。無条件で取り消しましょう」

先生は、頭を下げられました。場を取り繕⁽⁵⁾おうという気持ちも、勿論^{もちろん}、あったでしょう。いえ、それだけだと思います。正直に言えば、生徒にやり込められる先生に、いささか、がっかりもしました。

でも、――後から思えば、中島先生の瞳には、別なものが、あったようです。

先生はこの時、すでに御自分の病気も、生の終わりも意識しておられた。だからこそ、一途な思いを表白する沢口さんの若い命が、愛^{いと}しくてたまらなかった。それ故^{ゆえ}、出て来る言葉は、あれしかなかった。

――今、間近に迫った、自分の死を感じる時、そう思えてならないのです。もはや確かなものは、一瞬に燃え上がる《純粹》しかない、と。

問一 傍線部(1)「蘇って」(2)「鶯」(3)「奉る」(4)「詠んだ」(5)「繕おう」の漢字の読みをそれぞれひらがなで記しなさい。

問二 空欄ア、エに補うのに最適な語をそれぞれ次から選んで番号で答えなさい。ただし同じ番号を二度以上使用してはいけません。

1. ただ
2. いつも
3. ふと
4. なおも
5. そのまま

問三 傍線部(i)ゝ(iii)の語意として最適なものをそれぞれ選び、番号で答えなさい。

(i) 妙味

(ii) 眈を決している

(iii) 詭弁

1. 古びた風合い
2. すぐれた味わい
3. 不思議な特徴
4. 神秘的な雰囲気
5. 風変わりな趣

1. 決意をしている様子の
2. 困惑している様子の
3. 悲哀を感じている様子の
4. 不安を感じている様子の
5. 焦燥を感じている様子の

1. 失礼な表現
2. 不誠実な言い訳
3. こじつけの論法
4. 見えすいた嘘
5. 危険な思想

問四

傍線部 A に記された表情からうかがえる「中島先生」の内面の説明として最適なものを次から選び、番号で答えなさい。

1. 時局に反した発言をとがめられて、なんとかごまかそうとしている。
2. 「優子さん」も時局に反抗的であると知って、期待が高まっている。
3. 質問をして授業を盛り上げてくれた「優子さん」に感謝をしている。
4. 話をちゃんと聴いて、鋭い質問をした「優子さん」に感心している。
5. 「優子さん」が思いがけない解釈をしたので、驚きとまどっている。

問五

傍線部 B 中の「引っ掛かりの正体」の説明として最適なものを次から選び、番号で答えなさい。

1. 人麻呂の歌に対する陛下や周囲の人の「微笑み」が、単なる微笑み以上の意味のあるものではないだろうかということ。
2. 中島先生の人麻呂の歌に対する解釈は単なる想像に過ぎないのであって、根拠に乏しいのではないかとということ。
3. 人麻呂の歌は単に陛下の威光を称えるだけのものではなく、言葉遊びの側面もあるのではないかとということ。
4. 人麻呂という歌人は単に優れた歌詠みであるだけではなく、政治家としても有能だったのではないかとということ。
5. 優子さんは人麻呂の歌の深い意味をよくわかっていて、それをひけらかすように質問したのではないかとということ。

問六

傍線部Cで、「沢口」がこうにしたのはなぜだと考えられるか。最適なものを次から選び、番号で答えなさい。

1. 先生に抗議をした「優子さん」にすぐ続いて発言しなかったから。
2. 先生の歌の解釈があまりに常識はずれでびっくりしたから。
3. 先生が不用心すぎるのですぐに話をやめさせようと思ったから。
4. 「優子さん」より自分のほうがよくできることを見せたかったから。
5. 帝が神ではないかのような話をする先生に憤慨し、激高したから。

問七

傍線部Dについて。ここでの「中島先生」の心情はどのようなものと考えられるか。最適なものを選び、番号で答えなさい。

1. 今はいくら「帝は神ではない」と言ったところで、洗脳されきっている生徒たちにはわからないのだからとすっかりあきらめている。
2. 極端な考えとはいえ若者らしい純粋な気持ちで信じているのだから、いまはそのまっすぐなところを大切にしようと思っている。
3. 不敬罪で逮捕されるようなことがあっては大変なので、ここは生徒のいうとおりにしておこうと自分を無理やり納得させている。
4. 病気が重くなってきてもうどれほども生きられないとわかっているので、細かいところはどっちでもいいとやけになっている。
5. 元はお嬢さん育ちで素直な生徒なはずなのに、激しい態度をとるような生徒に変えてしまう戦争に対して憎しみを感じている。

次の1～5のA・Bについて、どちらかが適切ではない表現を含んでいる場合、適切ではない方の記号（A・B）を記しなさい。
また、どちらも適切ではない場合はCと、どちらも適切な場合はDと記しなさい。

1 A 根も葉もない噂話を真実のように話すなんて、ぞつとしない行いだ。

B それはあまりに安っぽくて、結婚のお祝いに渡すものとしてはぞつとしない品だな。

2 A 被災者のために生徒会で募金することになった。

B お小遣いの中からほんの少額だけど募金することにした。

3 A 前回の試合で煮え湯を飲まれた相手と再び対戦することになってしまった。

B 入社試験でこんな難問を出題されるとは、煮え湯を飲まれたような気持ちになる。

4 A 法案が成立した後に衆議院を解散します。

B 法案が可決された後に衆議院を解散します。

5 A 賢明な彼だけはどうだった見方で問題の本質をとらえているよ。

B 彼は性格がひねくれているから、いつもどうだった見方しかない。

四

次の1～5の近代詩人の作品(詩集)を後の選択肢から選び、記号(A～E)で答えなさい。ただし同じ記号を二度以上使用してはいけません。

1. 高村光太郎

2. 萩原朔太郎

3. 宮沢賢治

4. 北原白秋

5. 中原中也

【選択肢】

A. 『邪宗門』

B. 『在りし日の歌』

C. 『智恵子抄』

D. 『春と修羅』

E. 『月に吠える』

【前期】一般選抜 『国語』 答案

(40) 一

問一 (10) 2×5	問二 (6) 2×3	問三 (4)	問四 (4)	問五 (3)	問六 (3)	問七 (4)	問八 (6) 3×2				
(1)	ア	何を目的として競い合うかが、 合わせるように変化したこと 時代の風潮に	競争に	下品な	真つ	永遠に	1				
獲得	5		に	欲望	当	に					
(2)	イ		勝つ				4				
好況	2		ー					人生	わり		
(3)	ウ		てしま					らし	の		
唐突	3		ま					き	ない		
			う。					もの	梯子		
大抵										レ	
										ー	
										ス	
(5)	不可逆										

(40) 二

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七
(10) 2×5	(8) 2×4	(6) 2×3	(4)	(4)	(4)	(4)
(1)	ア	(i)	4	1	5	2
よみがえ	3	2				
(2)	イ	(ii)				
うぐい	1	1				
(3)	ウ	(iii)	3			
たてまつ	5	3				
(4)	エ		4			
よ						
(5)						
つくろ						
おう						

(10) 三

1	D
2	B
3	C
4	A
5	B

(10) 四

1	C
2	E
3	D
4	A
5	B